

命よ、光れ！

5年 M・Nさん

「明日、自分はもう生きてはいないかもしれない。」

東日本大しん災で被災した奈緒さんは、避難所となった学校でそう思ったそうだ。当時、小学五年生。今の私と同じ学年だ。友達と笑い合い、一緒に過ごした学校の様子は一変した。平和で当たり前だった日常は、ある日突然に壊されてしまったのだ。

私の母は、二才の時に家が火事になって大火傷を負った。この話を聞いた時に私は、突然の不運に見まわれることは誰にでもあるのだと息を飲んだ。母は、その後の生活のほとんどを病院で過ごすことになる。学校にも通えず友達もいない。そんな孤独の中で、それでも生きてこられたのは、母を生かそうと助けてくれた人達の存在に気がついたからだ。

「助けてもらった命には役目がある」

そう決意した母は、勉強とリハビリを続けて看護師になるという夢をかなえた。自分が助けてもらった分、今度は困っている人を助けたいと思ったから。

震災にあつた奈緒さんにも、助けてくれる人たちがたくさんいてくれた。みんなが辛いのに、相手の辛さまで一緒に抱えて生きようとしてくれた。そんな気持ちに答えるように、学校新聞を通して人々を元気づける奈緒さん達は強い。辛いことを経験した人は心が強くて優しい。自分が傷ついて辛い思いをしたからこそ、相手の辛い気持ちをわかろうと寄り添って生きることが出来るのだから。

人が人を思いやる時、心は優しさに包まれる。このあたたかく尊い気持ちが、命の光なのかもしれない。目には見えないけれど、すぐそばに感じる愛。私も私の命を光らせて生きたい。私の命が光る時、きっとそこにはたくさん笑顔と優しさがあるのだろう。

この世に生きるすべての命よ、光れ！